

# 稱讚 二二八号

二〇二二年二月一日発行

慈悲に聖道・浄土のかけりめあり。  
聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏と成りて、大慈大悲心をもつ、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云々。

歎異抄』第四条

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP [shousanji.com](http://shousanji.com)



2021（令和3）年1月16日（土）午前10時  
オンライン御正忌報恩講 宗祖親鸞聖人像  
お写真を撮ってしまいました

COVID19の禍中、

緊急事態宣言中

お見舞い申しあげます。

ご本山で親鸞聖人の御正忌報恩講が始まる一月九日、がん患者・家族語らいの会」のオンライン講演会が行われました。

今回のご講師は、豊島勝昭氏 医師・神奈川県立こども医療センター（新生児科部長）であり、周産期医療ドラマ「ユウノドリ」の医療監修をなさった先生でありました。

講演の冒頭、「障がい者」の定義を問われました。これまで「障がい」の「がい」は「害」では決まらない、差別の言葉とならないように「不自由さ」と表現することを学んできましたが、「大」と、尋ねられると、考え込んでしまいました。私は、どこかに自身を正常とし勝手に想像して相手を見ているんだと思いました。お話の中で泣いたら死んでしまう赤ちゃんがおられることを初めて知らされました。

私は、赤ちゃんが誕生すると、誰もが「おめでとう」と祝福するものでありますが、誕生の「嘘」は「嘘・偽り」の意味があり、赤ちゃんは、嬉しくて「オギャー」と声を出して生まれてくるのだろうか？勿論、泣かないと生命が危ないとも聞くけれども、この嘘・偽りの世界に生まれた嘆きなのかも知れない。そして、この嘘・偽りの世界に居る私たちを仏にしようと思われてきてくれたからこそ「ありがとう」の思いを持つことではないでしょうかとお話してきたことを、顧みるご縁をいただきました。

医学医療の進歩により、助からない生命が助かるようになり、泣かない赤ちゃんを無理矢理泣かせると助かるその生命が逆に危ぶまれる。一方、助かる生命を助けられなかった場合もあるわけです。生命に携わるお医者さんを

はじめ、看護師さん、ご家族は、一瞬一瞬、気を抜かず、真摯に生命に向きあっておられるのですね。豊島先生の新生児集中医療室（NICU）では、二十四時間、親御さんが、看護師さん、お医者さんが付き添っておられるのですが抱っこできずに、お別れしなければならぬならないように、細心の注意をはらって親御さんに抱っこできるようにしているそうです。また退院を勧め、それは「看取る」ためではなく、限りある時間を一緒に生きる」ことにとつめておられます。

このCOVID19の禍中、感染しないように面会もままらないのが「常識」だから、ご家族は会えないではなく、最善の方途を常に摸索実践されておられることに感嘆するばかりでした。また、豊島先生は、私たちは、ともすると、山の高嶺（長生き）をめざして、足元の花（今のいのち）を見ない、踏みこぼしているのではないのでしょうかとおっしゃったことには、ハッとさせられたことであります。

二月十三日の「がん患者・家族語らいの会」オンライン講座のご講師は、日本で初めて在宅看護をなされ、現在も第一線で取り組まれている村松静子氏（看護師・在宅看護研究センターLLP代表）です。一月十三日に、オンラインで打ち合わせに参加させていただきました。先生の著書に『「自主逝のすすめ」があります（自主逝）とは、延命を望む病院で延命処理する等）か、自分らしく亡くなっていきたい（自宅で過ごす等）かを、自身で決めることのようにです。著書の中に「他力本願ではだめ」なことが記されておりますが、ここで言われているのは、他の人の判断に従うのではなく、意識

あるうちに、患者さん自らの意思を尊重しあうということであります。浄土真宗の教えからは、不本意な言葉表現ですが、未だ患者さん中心ではない日本の医療の在り方を嘆いての言葉と受け止めたいと思います。

村松先生は、延命・過度の治療はせず、自然に任せ寿命を全うできるように、介護のお手伝いをしておられるのです。

「自主逝」と聞き、死を自分で選ぶのだからかと思ひ、安楽死」の可否について、

村松先生は、安楽死」の賛否については、それぞれの思いがおりだと思ひますが、私たちは、当事者が「安楽死」のことを考えないで済む、それを望まないで済むように、寄り添うことを心がけていますとおっしゃいました。

豊島先生・村松先生の営みのお姿は、「聖道の慈悲」に当たるものなのだと思います。『歎異抄』で述べられる「聖道」「浄土」は、大乘仏教で言われる自力の「聖道門」・他力の「浄土門」のことではないと思ひます。この場合の「聖道」とは、この現世での私たちの慈悲（情・行動）のことであるかと思ひます。たすけとぐる」とは、究極的には生命そのものを助ける」ということであります。きばめてありがたし」だから、大変難しいことであるわけです。あわれみ、悲しみ、育み、慈しみ、助けよう」とすることは、本心に素晴らしいことであり、たとえ、助けられなかったとしても、その行程は尊い情・行いなのだと思ひます。

一方、「浄土の慈悲」について、医療の専門家でもない私が「ただ念仏だ」と言ひ、お念仏をとねえることだと解釈することは、ここで

言われる「聖道の慈悲」と同じ土俵でしかないと思ひます。もしかしたら、慈悲とは言えないのかもしれないが、患者さんのことを思ひ、お念仏しているなら、自力の慈悲のうちに入るのでしょうか。

『歎異抄』に説かれる「浄土の慈悲」とは、阿弥陀さまの本願力（本願他力）のことを仰つておられます。また「聖道の慈悲」が「たすけとぐる」と言われる一方、「浄土の慈悲」では「利益する」と使い分けられておられます。生命を助けるということではないようです。

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり」との「変わり目」とは、「転換」するということであり、その目とは、阿弥陀さまのご本願に遇つた機縁を言うのだからと思ひます。

浄土の慈悲」はお念仏申す人生を歩み、この世のいのちが尽きたとき、即、仏さまとなつて有縁の方々にはたらく、仏さまにしか出来ない大きな慈悲こそを言うのだとおっしゃる。今生ではたらく私の慈悲は、私が起こしている慈悲と思ひ込んでいる間は、自分が亡くなれば、徒勞に終わってしまい、恩愛の繰り返しなのかと思ひます。

この身が仏に成ることが第一と言ひのではなく、慈悲を掛ける相手を通して実は阿弥陀さまの大慈悲が私を仏にしようよと「哀れみ、悲しみ、育み、慈しみ、助けたい」との思い、仏さまのよ（な心）を抱かせるのでしよう。それは、慈悲を掛けていた相手が亡くなったとしても、その方はお浄土に生まれ、仏さまとなつて、阿弥陀さまのご本願に包まれていることを伝えてくださつておられる。それがお念仏と思ひます。だから、お念仏申すことが、一貫した大慈悲だと仰るので。

親鸞聖人御誕生八五〇年  
立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

## 親鸞聖人を知ろう

### 歎異抄』に語られた親鸞

佐藤 正英氏

前号の続きから)

唯円はまた、次のような言葉を伝えている。

善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。  
(歎異抄』第三条)

「善人でさえも次の生に西方極楽浄土に往生まれることができるのです。まして悪人はいうまでもありません。」

この言葉は、法然の言葉である。親鸞が深くこのころにとめていて、唯円に語り伝えた法然の言葉の一つである。阿弥陀仏の誓願の覚信を端的に、鋭く言いとった言葉であって、ともすると誤解を招きかねないので、唯円は次のように言葉を補っている。

悪人とは、煩惱愛欲にまみれた凡常な衆生、すなわち、絶対知から遠く隔たっているところの私たちである。阿弥陀仏は、悪人である私たちを哀れみ、悲しんで、次の生に西方極楽浄土に往生生まれさせる手だてを為された。しかし、私たちは、現生における自身の能力や資質を待みにして、善とは何かを己なりに知ってお

り、己なりに善を作為していると思ひ倣している。言い換えれば、私たちは自身はそれなりに善人であると思っている。阿弥陀仏は、そのような私たちをも見捨ててはおられない。しかしそれなりに善人であると思っている私たちが、阿弥陀仏の誓願をひたすら待むところが自身に欠落していることに気づいていない。いわば間接的に、間を隔てて阿弥陀仏に出逢っているにすぎない。己の煩惱愛欲の深さ、重さに向きあって、作為する善を待むころを捨て、悪人でしかありえないことを引き受けたとき、私たちははじめ、阿弥陀仏の哀れみ、悲しみに直に出逢うのだ、と唯円はことばを補っている。自身が絶対知から絶望的なまでに隔たっているところの悪人であることを引き受けることは、私たちにとって決して容易ではない。ほかならぬ私たちの煩惱愛欲の深さ、重さが、悪人であることを引き受けることを妨げているからである。

親鸞は、『淨土和讃』において、大無量寿經』の經文に基づいて次のように詠っている。

一代諸經の信よりも  
弘願の信楽なほかたし。  
難中の難もこときたまひ、  
無過此難とのべたまふ。

大意 釈迦仏が一代のうちに説いた様々な教説を信ずる難しさよりも、阿弥陀仏の誓願を信ずることはさらに難しい。難中の難であり、これ以上の難はない。) )

あるとき唯円は、南無阿弥陀仏と称えて

も、天に踊り地に躍るよろこびのところが通りいっぺんでしかないこと、また少しもはやく西方極楽浄土に往生生まれたい思いが欠けていることは、どうしたことでしょうか」と尋ねた八十歳を越えていた親鸞は、次のように答えた

「私もその疑問をいだいていたのだが、唯円よそなたも同じころであったのですか。天に踊り地に躍るほどによろこぶべきことをよろこばないことで、次の生に西方極楽浄土に往生まれることはますます間違いないと思われます。よろこぶはずのことをよろこばないのは煩惱愛欲のしわざであると阿弥陀仏は知っておられて私たちに呼びかけておられるのです。くり返し思念するに、阿弥陀仏の誓願は私のような衆生に向けられているのだとますます頼もしく思い倣されるのです。」

ちよっとした病気にかかる心細く思うのも煩惱愛欲のしわざである。はるかな前生以来、生死流転をくり返し、棲み馴れた境界は捨てがたく、西方極楽浄土が恋しくないので、煩惱愛欲が盛んだからである。名残り惜しくても現生における縁が尽き、どうしようもないままに西方極楽浄土に往生生まれることになるであろう少しもはやく西方極楽浄土に往生生まれるたい思いが欠けている念仏者に対してこそ、阿弥陀仏は誓願を立てておられるのだと親鸞は言う。阿弥陀仏の誓願に出逢って五十年の歳月を経てもなお阿弥陀仏の誓願への信に躓く己を見据えてやまず、思念を重ねて、そのつど阿弥陀仏に出逢い続ける念仏者としての親鸞の肉声である生きた言葉を唯円は伝えている。



## 親鸞の手紙

浅井 成海氏

## 親鸞の手紙の特色

親鸞の手紙は、四十三通が伝えられている。七十九歳より八十八歳のもので、親鸞の晩年を知る貴重な資料である。四十三通のうち、真筆の書簡と書写書簡に分けられるが、その手紙を受けとったグループごとにまとめられ、『末燈鈔』、『御消息集』、『血脈文集』などと呼びならわして伝えられてきた。それぞれのグループのみ伝えられてきたものと、他のグループにも伝えられて書写されてきたものもある。最近では、グループごとに伝承されてきたものを、本願寺より出版された『浄土真宗聖典』(註釈版)では、親鸞が出された手紙のなかで年時月日のわかるもの、月日のみわかるもの、まったく月日のわからないものなどに分けて編集されている。したがってこの『浄土真宗聖典』(註釈版)に収められている『親鸞聖人御消息』(第二通は脚註には『末燈鈔』(20)と記されている)もとの出典がわかるようになってくる。いずれにしても、親鸞の門弟は手紙を大事に伝承してきたことが知られる。

四十三通の内容については多岐にわたるが、つぎのような特色を見ることができよう。

(一) 親鸞の手紙を門弟の人びとは、阿弥陀仏のみ教え・念仏のみ教えについて説かれた聖教、法語とみていたことが知られる。

(二) 主著『教行信証』(98〜97頁)に親鸞の教えは集大成されているが、手紙にはその基本

線をおさえながら、わかりやすく、円熟した内容が示されている。

(二) 親鸞の関東在住は、四十二歳頃より六十二歳頃までの二十年間とまられるが、その後京都帰洛ののちにさまざまな異義が生じてきた。その内容を知ることができる。例えばあとに述べるが、悪人が救われるという教えを極端に考えて、どのような悪をなしつつでも救われると説く人びとがあり、親鸞はそれらをきびしく誡めている。

(四) 門弟の人びとが親鸞をとて慕っていたことが知られる。また親鸞も門弟の一人一人を大事にしていたことが知られる。

門弟への宛名に「性信御坊」と敬語が使われ、かつては修験道の修行者であり、親鸞の念仏布教を憎み、殺そうとしたが、親鸞の教化に遇って弟子となったと伝えられる(『御伝鈔』) 弁円がのちに明法房となり、その死の知らせを聞いて「明法御房の御往生のことをまのあたりきき候ふも、うれしく候ふ」明法房が往生なさったことを直接お聞きしましたのもうれいことです。御消息第三通とある。

(五) 関東の方々より仕送りを受けており、そのお札を述べる手紙が何通かあるが、そのなかに「御こころざしの銭五貫文、十一月九日にたまはりて候ふ」お志の銭五貫文を十一月九日にいただきました。第三十三通とある。一貫文は一千文で、米一石が買えたといわれる。限られた資料ではあるが、関東の人びとの、京都で生活する親鸞への熱い思いを知ることができ

## 臨終の善悪をいわず

現在伝えられる手紙のなかでは、七十九歳のものがもっとも若いですが、門弟の疑問に答えたもので、臨終を迎えを期待するものは自力で往生を願うひとであり、十八願の信心のひとは、平生において仏になるべき身と定まっている。現生に正定聚の位につく。臨終に仏さまのお迎えを待つ作法などは、いっさい必要ではないと述べている。従来の浄土教は、臨終の来迎を期待し、その儀式などにも注目してきたが、親鸞はこれを否定し、聖道の教えと、浄土の教えの違いをあきらかにし、さらに浄土の教えのなかに真実と方便(仮門)があることを説き、法然の教えを継承する選択本願の教えが浄土真宗であると明示する。すでに『教行信証』のなかに示される教判(教相判釈)の問題をここではわかりやすく説き、救いの教えの究極が十八願の教えにあり、全仏教の帰するところであるとところをあきらかにしている。

この第一通によりわかるように、平生に救いは成立すると説くから、それに関わる疑問が、手紙のなかでもいろいろと問われ、それに親鸞が答えているものもある。

救いは信ずる一年に成立するか、それとも臨終まで念仏を相續して成立するかという、二念と多念の問題(第十八通)あるいは、行の一念と信の一念の問題(第七通)。また信ずるときが、平生とするならば、その救いの内容について「如来とひとし」「弥勒と同じ」と表現するけれども、即身成仏の教えと、どのように異なるのか、また従来説かれてきた弥勒信仰とはどのような点で異なるのか、などが述べられている(第十一通)。

自然法爾の世界

親鸞の教えの特色は、往生の因について、念仏も信心も如来より与えられる 如来回向の(大信)と説く。これは『教行信証』に明示されていることであるが、手紙には、つぎのように表わしている。

誓願と名号の関わりについて述べるのであるが、どちらかにとらわれるのではなく、

ただ誓願を不思議と信じ、また名号の不思議と一念信じとなへつるうへは、なんでふわがはからひをいたすべき。ききわけ、しりわくるなどわづらはしくは仰せられ候ふやらん。これみなひがごとにて候ふなり。― ただ誓願を不可思議であると信じ、また名号を不可思議であると疑いなく信じて念仏しているからには、どうしてそこに自らのはからいをさしはさむことなどできるでしょうか。誓願と名号について、聞いて区別して考えるものであるなどと、わづらわしいことをいっておられるのでしょうか。これらはみな誤った考えです。第二十三通)

本願を信じて救われるのか、名号 念仏を申す)を信じて救われるのか、それらはまったく同一のことであり、どらわれるべきではないと強調し、かさねて 往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候ふなり― 浄土往生のための行いには、自らのはからいをさしはさむことなどあってはならないのです)とあり、さらに ただ如来にまかせまゐらせおはしますべく候ふ― ただ阿弥陀仏におまかせしなければりません)とあり、すべては如来の手だてにおまかせしていくことを明らかにしている。

親鸞聖人七十五回大遠忌記念 親鸞

「歎異抄」に語られた親鸞

佐藤 正英氏 著

(別冊 太陽)平凡社発行)より抜粋

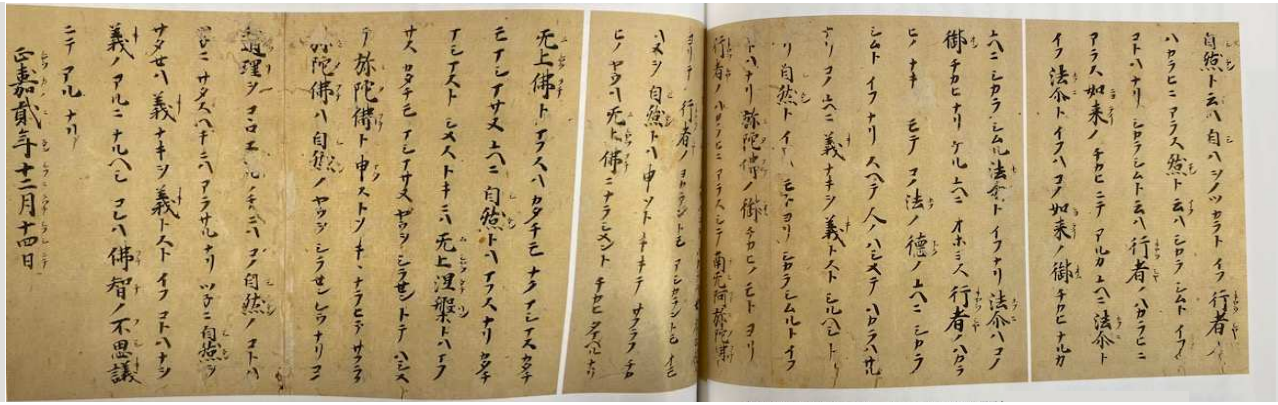
これらの徹底した他力の教えをもっともわかりやすく述べたのが、自然法爾の事(第十四通)と表わされる法語である。結びに 愚禿親鸞八十六歳と書かれている。このほかに顕智の書写本と、文明版の『正像末和讃』にも収められている。『正像末和讃』では八十八歳の成立であることが知られるので、もっとも円熟した最晩年の法語である。自然法爾の事では、はじめに 自然法爾の用語一つひとつを取りあげ、すべて如来のはからいであり、他力であることを述べる。それは本願力を自然で表わすと示し、誓いの内容は 如来が南無阿弥陀仏とたのませたまふことである―とあきらかにしている。さらにその阿弥陀如来は、表現を超えた無色無形の如来であり、衆生が仏に成るということも思いやことばでは表わすことができない。さとりの内容をこの身に受ける―ことだと示し、この無色無形の真如一如が、具体的に阿弥陀仏に顕現された、救済の根源となる阿弥陀如来とはどのような仏であるかを論ずる。このように本願力の誓いの内容を自然と表わすだけでなく、さとりの内容を自然と表わすこと、自然はことばや思惟では表わすことができないと示し、つねに自然を沙汰せず、義なきを義とすといふことは、なお義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなるべし―

常に 自然)について思いはからうようなら、自力のはからいがまじらないことを根本の法義とする)といったところで、それははからっていることになるのです。これは、思いはかることのできない仏の智慧のはたらきそのものなのです)と結んでいる。すべては、如来のはからいであり、如来の智慧のはたらきである

と結論づける最晩年の自然法爾の世界に、ことばや思惟を尽くしながら、それを超えた他力の世界の結論をみるのである。このように如来のはからいがすべてであると表わす 自然法爾の表現を尽くしながら、同時に成立する『正像末和讃』に述べられる 愚禿悲歎述懐和讃)に示される自己への悲泣があること、そのような深い自己を見つめるところがそのまま、自然法爾の世界とひとつになっっていることを注目すべきである。

次号二一九号に続きます。

『末燈鈔』(室町中期写本)所収 22通の内5 京都・龍谷大学図書館





アメリカで、小さな女の子が、郵便配達の方が来られたら、手話で挨拶、お礼をする動画が話題になっていました。手話は、ソーシャルディスタンスを取り、声を出さなくても、思いを伝えられることを改めて知らされました。少しおぼえたいと思います。

★手話 挨拶の表現 その1



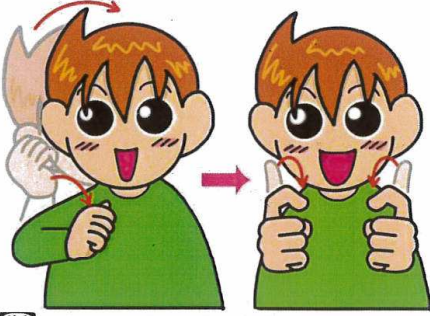
**挨拶・礼**

胸の前で両手の人差し指を立てて向かい合わせて同時に曲げます。人と人が挨拶している状態を表しています。



**朝・起きる・起床・おはよう**

頭をこぶし側にかたむけて、手をおろすのと同時に頭をあげる。起きるときに枕から頭を離す仕草からきているそうです(〃)



**おはようございます**

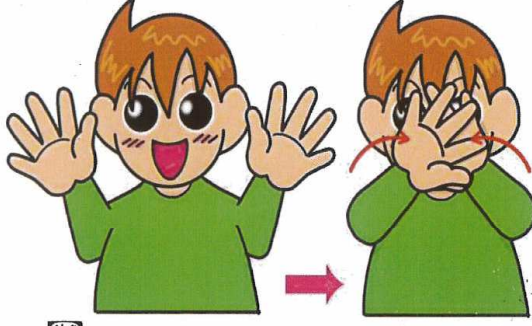
[朝]+[挨拶]=おはようございます。



**こんにちは**

右手をチョキにして額に当てる。時計の針が12時をさしている状態を表しています。

[挨拶]の手話



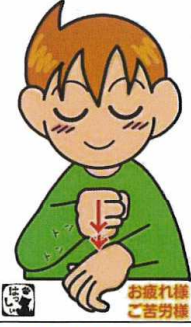
**暗い・夜・こんばんは**

両手をパーにして前におけ、目の前で交差させるように弧を描いて引き寄せます。あたりかだんだんと暗くなっていく様子からだそうです。



**寝る・就寝・泊まる**

寝る・就寝・泊る・宿泊・おやすみ  
頭をかたむけて、グーにした右手をこめかみの近くにあてます。



**お疲れ様**

右手でこぶしを作って左手の手首のところをトントンと2回たたきます。



**苦勞・大変・面倒**

表情を変えて…。「お疲れ様」の手話と同じ動き  
[苦勞・大変・面倒]



**ありがとう・感謝・お礼**

左手の甲を上に向け、右手の手刀で左手の甲を1回ポンッと叩いて同時に頭を下げる。相撲の時にやる手刀の表現だそうです。

手話しゅわ会 テキスト HARU作成  
※イラスト 手話しゅわSHUSHUSHUより引用



食事前後は、手を合わせて「いただきます」「ごちそうさま」ですが、声を出さずとも、手を合わすだけでもよいと思います。「食前食後のことば」を申すときは、本願寺では下記の手話を考案しております。挑戦してみてください。

**食前のごことば**

**手話表現パンフレット 食事のごことば**

原文 <sup>しょくじ</sup> 食事のごことば  
 表現 <sup>しょくじ</sup> 食事 / <sup>ことば</sup> 言葉 [かざかっこ]



下記参照

曲げた両手人差指を上下に置き、「」を示す

[代表者]  
 原文 <sup>おほ</sup> 多くのいのちと、 <sup>(V)</sup> みなさまのおかげにより、 <sup>(V)</sup> このごちそうをめぐまれました。

表現 多い いのち みなさま 助けられる これ 食事 いただく

動作 両手の親指から順に折りながら左右へ引き離して握る  
 右拳を左胸にあてる  
 右手掌をトに向けて水平に半円を描く  
 立てた左手親指の甲側を右手掌で手前へ2回たたく  
 食事を右手で指す  
 掌を上に向けた左手から右手2指を口へ運ぶ  
 掌を上に向け、揃えて出した両手を手前に引き寄せる

[全員で]  
 原文 <sup>おん</sup> <sup>ふか</sup> 深くご恩を喜び、 <sup>あか</sup> <sup>よろこ</sup> ありがたくいただきます。

表現 仏恩 (ぶつとん) ※解説参照 喜ぶ (表情豊かに) ありがとう 合掌

動作 阿彌陀仏の印  
 手の甲を外側に向け、上の方で膨らませて伏せた左手甲の上方で湾曲させた右手を回す  
 湾曲した両手の指先を胸に向け、交互に上下に動かす  
 左手甲に小指側を直角にのせた右手を上げながら頭を下げる

**<裏面に食後のことば>**

発行：浄土真宗本願寺派 社会福祉推進協議会  
 編集：手話表現研究専門部会  
 参考：浄土真宗本願寺派総合研究所ホームページ  
<http://j-soken.jp/>  
 わたしたちの手話学習辞典  
 (財団法人 全日本ろうあ連盟出版局)  
 手話で表す仏教用語  
 (浄土真宗本願寺派 社会部)

**食後のごことば**

[代表者]  
 原文 <sup>とうと</sup> 尊いおめぐみをおいしくいただき、 <sup>ご おん ほうしゅ</sup> ますます御恩報謝につとめます。

表現 大切な 愛 おいしい 食べる 終わり もっと 仏恩 (ぶつとん) ※解説参照 感謝 努力する

動作 湾曲させた右手掌で左頬を軽くたたく(まわす)  
 膨らませて伏せた左手甲の上方で湾曲させた右手を水平にまわす  
 右手掌で頰を左から右へ撫でる  
 掌を上に向けた左手から右手2指を口へ運ぶ  
 指を上に向けて開いた両手を同時に下しながら5指を閉じる  
 左手2指の親指の下につけた右手2指を上げ、左手人差指にのせる  
 阿彌陀仏の印  
 手の甲を外側に向け、上の方で膨らませて伏せた左手甲の上方で湾曲させた右手を回す  
 左手甲に小指側を直角にのせた右手を上げながら頭を下げる  
 左手掌にあてた右手人差指の指先をねじりながら前へ押し出す

[全員で]  
 原文 おかげで、ごちそうさまでした。

表現 助けられる 合掌

動作 立てた左手親指の甲側を右手掌で手前へ2回たたく

**<食前のごことば解説>**  
 わたしたちは、食べ物いただくことで、毎日を過ごしています。この食事には多くのいのちをいただいています。またこの食事がわたしの口に届くまでには、多くの方のご苦勞もありました。  
 阿彌陀さまは、わたしたちが、多くのいのちと、みなさまのおかげによって、初めて生きることができているのだと、明らかにしてくださいました。  
 このご恩を思い、お食事を大切にいただきます。

**<食後のごことば解説>**  
 お食事をいただいたわたしたちは、尊いおめぐみをいただきました。多くのいのちと食事を留意してくださった方々のご苦勞を思い、そのおかげでいのちをいただいています。いまここに、いのちあるわたしを、必ず救うと願い、支えてくださっているのが阿彌陀さまです。このご恩を思い、阿彌陀さまの願いに応えようと、精一杯に生きていきたいと思います。

※(V) は手話文の区切りです。うなずきや間を入れます。

**<裏面に食前のごことば>**



## 稱讚寺 行事予定

二〇二二年 二月の行事予定

- 六日(土) 門信徒の集い 午後一時
  - 七日(日) 日曜礼拝 午前七時
  - 四日(日) 日曜礼拝 午前七時
  - 六日(火) のんのん法話会 午後一時
  - 二日(日) 日曜礼拝 午前七時
  - 二六日(金) のんのん法話会 午後一時
  - 二八日(日) 親鸞聖人を知ろう 午後二時
- 慎みの生活の中、なかなか、外出もままならないことではありますが、愈々、お念仏を相續いただきますようお願い申し上げます。

ぶほう じだい か  
**仏法 時代は変わつても**

か しんじつ  
**変わらない真実**

二〇二二年 心をともしび「二月カレンダー」より

二〇二二年 三月の行事予定

- 六日(土) 門信徒の集い 午後二時
- 七日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 四日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 六日(火) のんのん法話会 午後二時
- 二日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 二六日(金) のんのん法話会 午後二時
- 二八日(日) 親鸞聖人を知ろう 午後二時

二〇二二年 四月の行事予定

- 四日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 六日(火) のんのん法話会 午後二時  
 兼 灌仏会法要
- 二日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 六日(金) のんのん法話会 午後二時  
 兼 立教開宗記念法要
- 八日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 二五日(日) 日曜礼拝 午前七時
- 二六日(月) のんのん法話会 午後二時

## 編集後記

昨年(二〇二一年)の十二月初め頃、両手の甲が、ヒリヒリするなあと感じ、よく見たら、擦り傷のような痕がありました。何時か、両手を何か擦ったり、ぶつけたりしたかなあと記憶を辿ってみましたが、思いあたりません。そのうち、治るだろうとほっといていました。しかし何時になっても、治る気配がなく、心配になりました。年が明けても治らず、ある日、コマーシャルを見ていたら、ひび・アカギシに効く塗り薬の宣伝をしていました。もしや、これってアカギシ?と思いました。よくよく考えると、一人暮らしになり、偶に炊事をし、皿洗いをするようになって、十月月になります。春・夏は、水を扱うのは苦になりませんでした。秋・冬になって、水の冷たさは、手にしみるようになりました。また、外から帰ってきたら、アルコールで手を洗っていました。早速、コマーシャルの薬を買い、毎日、塗ってあります。お陰で、今は治ったようです。

これまで、アカギシなんてしたことがなかったものですから、毎日、炊事など、家事を行っている方が、アカギシやひび割れで悩み、その苦労など考えもしてありませんでした。少しは分かるようになったとは思いますが、姉が帰ってきたら、また、任せっぱなしになるのかなあ?手伝う気持ちは心に留めて置きたいと思えます。

西元宗助師だったと思いますが、お歳をめされた西元先生が、長年連れ添われた奥さまの足の裏をマッサージされて、はじめて、長年ご苦労をかけてきたことに気づかれ、感謝せずにはおれなかったと述懐なされたとのことでした。また、関西のある市長さんは、市長を任期満了で退任された後は、奥さまの介護に尽くされたことを聞いたことがあります。身内のお陰にもなかなか気づこうとしない、気づかないふりさえする私であります。このCOVID 19の禍中、少しでも気遣えたらと思います。